第３回瀬戸市基本構想審議会　協議事項要旨（R8.3.25 開催）

≪委員一覧≫

	所属等	氏名	分野等
1	南山大学総合政策学部　教授	石川　良文	都市環境政策、地域経済、**政策評価**
2	株式会社官民連携事業研究所	鷲見　英利	**官民連携**
3	ラジオサンキュー(RADIO SANQ) 瀬戸市障害者地域自立支援委員会	林　ともみ	**福祉**（障害者福祉)、マスコミ
4	大橋運輸株式会社	橋本　美香	**ダイバーシティ**、ＬＧＢＴＱ
5	多文化ソーシャルワーカー	神田　すみれ	**多文化共生**、外国人の社会参画
6	朝日インテック株式会社　　※欠席	梅村　佳範	**地域経済**、地域産業
7	名古屋大学情報学部　准教授	浦田　真由	**地域ＤＸ**、ＤＸ推進、オープンデータ推進
8	株式会社PoliPoli	伊藤　和真	**GovTech**（政治･行政×テクノロジー）
9	東海旅客鉄道株式会社事業推進本部	吉澤　克哉	**関係人口創出**
10	瀬戸くらし研究所　／　株式会社きんつぎ	野々垣　賢人	**地域デザイン**
11	土街人プロジェクト　／　双寿園	石川　圭一	**ローカルコミュニティ**、地域課題･魅力の見える化
12	愛知産業大学通信教育部造形学部　准教授	堀部　篤樹	建築計画、**住民参加型まちづくり**
13	名古屋学院大学現代社会学部　准教授	水谷　香織	**社会的合意形成**、参加協働、社会基盤計画

≪協議事項≫

１　次期瀬戸市将来計画　基本構想について

①やきものになぞらえた基本構想の評価

・クリエイティブなアプローチは評価できる。2040 年への危機感も良いし、人へのフォーカスが瀬戸らしさを表している。【伊藤委員】

・やきものの本質である４つの要素を使った表現はとても良い。さらに「ツクリテ」という言葉を追加しても良いのでは。【林委員】

・「ツクリテ」は、瀬戸焼に限らず様々な作り手がいるという広い意味で使われてきた。こうした言葉を改めて大切にすることも重要である。【石川会長】

・この資料からは瀬戸らしさや職員の瀬戸市に対する愛着も感じる。基本構想の方向性も前向きに評価できる。【堀部委員】

②「稼ぐ」視点の多面的展開

・良いまちの条件として、「①このまちといえば〇〇というフォーカス」、「②まちが良くなっていくという勢い（モメンタム)」、「③リーダーの存在」の３点を提示する。産業や人の増加で稼いで発展していく感覚が重要である。やきもの産業における事業継承支援や、クリエーター・スモールビジネス誘致にも取り組めると良い。【伊藤委員】

・瀬戸のやきものは海外にも通用するため、親日国をターゲットとした販路拡大と市による海外輸出支援が必要なのでは。【水谷委員】
・「増やす」ことも重要だが、断捨離の観点で「何を残して何をやめるか」を考えることも大切。【水谷委員】
・福祉の観点から考えると、どんな人でも稼ぐことができ、税金が納められる仕組みづくりが重要である。【林委員】
・「稼ぐ」は「社会に関係する、感謝される」ということに置き換えられる。【神田委員】
・「稼げる」ことは「チャンスが多い」ことと捉えられる。【鷲見委員】

③地域資源の再発見と活用

・地域資源の深掘りや捉え直しが必要。やきものや自然環境だけでなく、「あたたかい人のつながり」などソフト面の地域資源も重要であり、ハード・ソフト両面からの地域資源の活用により、価値を発揮できる計画になるのでは。【野々垣委員】
・瀬戸の挑戦しやすさを整理・発信し、外から人を呼び込むきっかけとするべき。【野々垣委員】
・「大学コンソーシアム」も大きな資源の一つ。多数の大学生が活動することで若者の関係人口が創出され、瀬戸の地域資源や人的資源が生まれている。【石川会長】
・コミュニティの場の不足が課題。自社の取組の中で、今後は瀬戸の文化・歴史に紐づけた取組により交流の場を充実させ、横のつながりによる支え合いを実現したい。【橋本委員】

④教育・人材育成と化学変化の創出

・外からの関係人口だけでなく、今の住民が「どう挑戦し、まちの担い手になるか」が重要。地域にいる人たちが、どう化学変化に加わるのかの検討ができると良い。【吉澤委員】
・「窯変」のように、結果が分からない化学変化を多様性として捉えることが、瀬戸らしいダイバーシティにつながるのではないか。【吉澤委員】
・産学官民連携で、「学」の視点を加えることを提案する。大学の知見や大学生の若い力は、「化学変化」を起こす重要な要素になる。【浦田委員】
・挑戦・チャレンジは、民間だけでなく行政・子どもたちにも必要である。学校教育の中で、チャレンジして失敗から学ぶ瀬戸らしい教育を展開し、探求学習を活かして高校・大学・地域の大人と共に学べる機会が重要になる。【堀部委員】
・「誰かと共に何かを生み出す力」を、子どもたちが培うための教育が重要になる。【神田委員】

⑤シティプロモーションと誇りの醸成

・シティプロモーションのターゲットとして、少し尖った価値観を持つ子育て世代や若者・大学生を含むツクリテ・クリエイター層を提案する。多くのアーティスト・起業家を輩出していることや、住みやすさなどの瀬戸市の強みをターゲット層に向けてプロモーションすることで、瀬戸の良さを明確に打ち出し、モメンタムや尖りを創出できるのではないか。【伊藤委員】
・小学校の商店街訪問授業で、子どもが継続的に興味を持つ事例や、私立中学校での生徒によるスポンサー集めなど、面白みのある教育が各学校で展開されることで、様々な世代への広がりが期待できるのではないか。【石川委員】
・地域で良い化学変化が起きても、外に知られなければ新しい人は入ってこないため、瀬戸市のブランド価値向上と外部への発信強化が必要である。【浦田委員】

⑥石川会長総括（今後の方向性について）

・基本構想においては、「何のために」という理念を明確にすることが重要。

・「稼ぐ」については多数の委員から意見があった。地域で稼ぐことにより、税収増加や新たなチャレンジが可能となる一方、人口減少や企業減少により稼げない状況下では、地域活力の低下につながってしまう。

・人とのつながりについても多くの意見があり、学校教育における地域連携・探求学習の推進、社会人の学び・交流の場の創出、外国人や多様な背景を持つ人々の活躍の場の拡大など、多様な人材がつながり活躍できる仕組みの構築が求められた。

・産業面では、やきもの産業はもちろん、それ以外の企業も含め、人口減少社会において外にどう売っていくか、より広げていくことが必要である。

・瀬戸市の資源や近隣の観光資源（ジブリパーク等）を活かし、人を呼び込む取組を進めることも重要であり、これらは「稼ぐ」「人のつながり」などの要素とも相互に関連している。

・今回の意見を事務局で整理し、基本構想案に反映させた上で、次回以降の議論につなげていきたい。

２　瀬戸市の関係人口創出に向けて

・メインターゲットを３０代から５０代に設定した理由は、インスタグラム利用者層であり、ふるさと納税のボリュームゾーンであること、瀬戸への来訪者で３０代後半が多いというデータからである。【事務局】

・関係人口の考え方として、「ファンとしての関わりから始めて、最終的には瀬戸市の地域を盛り上げてもらえるパートナー的な存在になってもらいたい」と考えている。【事務局】

・シティプロモーションは、外向きだけでなく内向きの発信も重要。それを踏まえると、「関係人口の創出」より「まちに化学変化を起こしてくれるパートナーをつくる」という目的・テーマ設定の方が良いのでは。【吉澤委員】

・将来像のキーワードである「化学変化」は動的な概念のため、その動きを可視化し、パブリックリレーションズの視点で考えることが必要になる。【吉澤委員】

・瀬戸のクリエイターを育成し海外展開すると良いのでは。CtoG のビジネスを行う個人を行政が応援し、全体を盛り上げていくことも一つの手である。【水谷委員】

・様々な意見を集約して動画に落とし込むことで、分かりやすく発信ができる。【水谷委員】

・年代を絞ったターゲット設定よりも、「化学変化を起こす」「チャレンジができる」人たちを見据え、瀬戸でチャレンジしたくなる、関係を持ちたくなる魅力を伝えるプロモーションが重要なのでは。また、市内の人が、プロモーションによりチャレンジ意欲が高まり、外の人と協働したくなる大きな流れの創出が必要である。【石川会長】

・総務省で検討が進む「ふるさと住民登録制度」の活用については、制度を活用しながら瀬戸らしい関わり方を磨き上げて進めていく方針である。東京のような多様な人脈やチャンスはないが、瀬戸独自の価値を発信していきたいと考えている。【浦田委員、事務局】

以上